

氏名	米山 大樹
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第524号
学位授与年月日	2020年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	晩年の室生犀星の文芸における関係的な様相の研究
審査委員	(主査) 金子 明雄(立教大学大学院文学研究科教授) 川崎 賢子(立教大学大学院文学研究科特任教授) 能地 克宜(明治大学文学部准教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序論

凡例

第一部 晩年の〈復活〉まで

第一章 戦中・戦後の『室生犀星文学年譜』未記載作品——「言葉」「桃源」

第二章 虚構の〈復活〉前夜——「蝶紋白」

第二部 関係的に機能する主体

第三章 数寄屋橋のナルシス——「地球の良日」

第四章 陶器を見る室生犀星——「陶古の女人」「李朝夫人」

第五章 〈老いる〉自己の再編成へ——「朝顔」

第三部 〈金魚〉のモチーフと連なりの方法

第六章 対話体小説という方法——「蜜のあはれ」

第七章 前日譚／後日譚の連なり——「絵と随想 金魚」「後記 炎の金魚」「水の中」

第八章 「わたくし」の言葉を引き入れること——「火の魚」

結論

初出一覧

参考文献一覧

(2) 論文の内容要旨

本論文は、室生犀星の創作活動の第二のピークとされる、いわゆる「市井鬼もの」を中心とした昭和一〇年前後の多作期と『随筆 女ひと』『杏つ子』などの刊行によって随筆家、小説家としての復活を果たす昭和三〇年代との狭間の期間に注目し、その停滞期に、対象を見ること・読むこと、対象について語ること・書くことをめぐる主体と客体の関係性を捉え直す様々な試みがなされ、そのプロセス自体が創作の中に書き込まれていったことを確認し、「書けない作家」という表現行為における障碍の感覚を基盤にした、表現する主体と表現される対象との関係性の再構築というモチーフが、「蜜のあはれ」を中心とした晩年の創作群にも引き継がれ、犀星の創作方法を解き明かす中心軸となることを、詩歌、随筆、小説のジャンルを横断する意味作用を構想したと思われる犀星の創作態度と重ね合わせるかたちで、作家としての犀星の全体像にかかわるものとして論証している。

第一部では、昭和一五年以降の犀星作品の書誌的調査によって新たに発掘した作品群から、戦中の戦争詩「言葉」と戦後の青少年向け短篇小説「桃源」を取り上げ、そこに描く主体と描かれる客体との距離（距たり）をめぐるモチーフを見出し、後の創作に見られる方法意識との関連性を明らかにする。また、『随筆 女ひと』に先行して刊行されたにもかかわらず、自身の作家としての復活劇から排除された作品集『黒髪の手紙』に収録された「蝶

紋白」を素材として、自身の入院生活と重ね合わされる文章の入院というイメージの中で、看護師との対話の再現などにおける日常の言葉との交錯によって文学の言葉が編み直され、復活が準備されるプロセスが神話的に表象されると同時に消去される様相が読み取られる。

第二部では、作者の似姿であると同時に作者が主体として関わった客体である「女たち」を描いた詩「地球の良日」、愛玩する陶器を女性に見立てて表現する「陶古の女人」「李朝夫人」、最晩年の犀星の住み込みの秘書となり、彼の最後を看取ることになる若い女性をモデルにして、彼女と老作家の出会いを描いた作品「朝顔」から、見る（読む・語る・書く）主体と見られる（読まれる・語られる・書かれる）客体との関係性の中に、不可視性（読解不能性、表象不能性）を媒介にして、主体と客体の境界線が崩れ相互浸蝕する様態そのものが織り込まれ、結果としてそれによって表現が成立していく過程が分析される。

第三部では、老作家と若い女性の言葉でしゃべる金魚との対話によって構成される対話体小説「蜜のあはれ」とその関連作品を検討対象として、犀星が昭和一〇年代から始める、登場人物の発話や内言を地の文に直接的に取り込む、二〇世紀文学の流れとも同調する表現上の実験の系譜にそれらを位置づけた上で、幻想を経由したモノローグ（一人称）とも、登場人物レベルで生起する自己矛盾や齟齬を内在させた発話の対話的意味作用（三人称）とも異なる、語る老作家と語られる老作家の距たりを内在させた関係性を含めて、対象を認識すること、語ることにまつわる障碍の感覚が、表現主体の輪郭を曖昧にすると同時に、その事態が表現そのものを成り立たせる様相を抽出する。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本論文の特徴の第一は、室生犀星の文学を論じるにあたり、一方で「晩年」という限定的な視座を敢えて導入しつつ、他方で検討の対象となる時期を戦中期まで拡張することによって、従来からなされてきた創作時期の三分区を見直す意志を示すとともに、「晩年の室生犀星」という問題設定から、犀星文学の総体を把握する理論的な枠組を構築しようとする野心的な態度にある。特徴の第二は、徹底的に表現の細部にこだわり、そこから読み取れる表現行為への自己言及的側面に着目して、創作家としての不遇、創作活動の停滞、老いや病などの内容的モチーフと、表現行為・表現方法に関わるモチーフを架橋することによって、犀星文学総体を徴づける認識枠組の構築を試みた点にある。微細な分析視点から俯瞰的な視界へ抜けようとする姿勢は本論文の重要な特徴となっている。特徴の第三は、実証的な書誌的調査に基づく未確認作品の発掘に顕著なように、注目されてこなかった小さな作品に着目し、それらの丁寧な読解を通して、犀星文学の流れを具体的なレベルから改めて再構成する志向にある。このような、見逃されることの多かった関連作品群への目配りは、小説と詩歌のジャンル別でなされることの多かった犀星研究に、随筆をも含めたジャンル横断的な探究の可能性を提起することに繋がっている。

(2) 論文の評価

本論文の学術的な価値は、まず、一九八〇年代の室生犀星研究が小説を中心に導入し、今日に至るまで踏襲されてきた活動時期の三区分の見取図に対して、未確認とされた作品を発掘し、二期と三期それぞれのピーク時期の間に位置する作品群に着目することで、三区分別れ自体を見直し、犀星文学を総体として把握する視座の可能性を示したことにある。また、共通したモチーフを有する小説と随筆、詩歌を相互に関連づけて論じる展開は、三区分別れからはみ出す時期、作品に目を向けることを通して犀星の全体像の更新を志向する近年の犀星研究の動向を補完すると同時に、そのような流れに方法論的な示唆を与えるものと認められる。次に、従来の研究ではほとんど注目されてこなかった「蝶紋白」「朝顔」「水の中」などの小さな作品に着目し、その表現行為の細部を詳細に分析することによって、「書けない作家」「老い・病」など、表面的なモチーフのレベルでは単なる変化と見なされ易い要素に、表現行為の方法の側面からの共通性を探る議論のあり方は、晩年の作品群から犀星文学の全体像を認識する視点を獲得する可能性を示す点において高く評価できる。室生犀星という作家総体の解明という目的地から見れば、本論文が到達した場所はまだまだ手前の地点に過ぎないと指摘することは可能であるが、今日の研究状況の中で十分な学術的貢献をなす論文と評価することができる。研究上の手続き、論文作成の作法も必要なレベルを充たしており、学位に相当する優れた研究成果と認めるものである。